

それでは、今日はキリスト教の葬儀についてお分ちしていきたいと思います。私たちは皆死ぬものだという事は、先程も繰り返しお伝えしている通りであります。100%の確率で私たちは死ぬわけです。生まれた途端に、もう死が始まっていくわけですが、それでも、「でも自分は例外だ。」と、どこかで勝手に思い込んでいるのが、私たちの愚かしさであります。人は死んでも、自分はまだ死なない、当分死なない。人の葬式に参列しても、それが我が事とはなかなか思わないわけであります。ただ、聖書にはこのように書いてあります。新約聖書のヤコブの手紙 4:13 から読んでいきますので、皆さんもお聞き頂きたいと思います。『¹³ 聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう。」と言う人たち。¹⁴ あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。¹⁵ むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」¹⁶ ところがこのとおり、あなたがたはむなしい誇りをもって高ぶっています。そのような高ぶりは、すべて悪いことです。¹⁷ こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。』私たちは皆、死に向かっているわけです。年齢順とは限りません。年寄りから先に死んでいくのではないのです。若い人が突然亡くなることもあります。子供が死ぬこともありますし、「人生これからだ。ちょうど折り返し点に來たばかり、老後をこれから楽しもう。」その矢先に突然死んでしまうことがあるわけです。ですから私たちは常に死を覚悟し、そして死ぬ備えを着々と進めていく必要があります。

で、ここでトマス・アケンビスという人の『死を黙想する』という表題の言葉を紹介させて頂くので、皆さんも聞いて頂きたいと思います。15 世紀の時代に書かれた『キリストに倣いて』という本から抜粋してお読みします。聖書の次に読まれているという名著です。『まもなくあなたは死ぬであろう。だからあなたは自分が死に対してどれほど備えをしているかを考えなさい。人は今日生きていても、明日はもう姿を消す。人々の目の前から一旦姿を消せば、すぐさま忘れられてしまう。現在のことだけに心を向け、未来のことをあらかじめ考えてみようもしない人間の心とは、なんと愚かで浅はかなものであろう。あなたは行いと思いとにおいて、今日死ぬかのように行動しなければならない。清い良心を持っているなら、死はそれほど恐ろしいものではない。死を逃れようとするより、罪を避けようとする方が正しい。今日死の備えができていないなら、どうして明日は出来ると言えるのか。明日は確かではない。その明日が来るかどうか、どうして分かるであろうか。』なすべき正しいことを知っていながら、それを行わないのは、その人の罪となります。さらにトマス・アケンビスはこう言っています。『自分の死の瞬間をいつも心に置き、毎日の死の備えをする人は幸せである。いつか誰かが死ぬのを見たならば、あなたもその人と同じ道を歩かなければならないのだと考えなさい。そして死がいつ来ても備えができてるように生活しなさい。あなたの死後誰があなたを思い出し、あなたのために祈ってくれるであろうか。愛する兄弟よ、今のうちに善を行いなさい。あなたは自分がいつ死ぬかを知らず、また死後どうなるかも知らないからである。時のある間に不朽の富を集めよ。』

死後どうなるか知らない、とトマス・アケンビスは言っておりますが、まあ実際には、私たちはイエス・キリスト信じる者であれば、死後どうなるかはもう明確に知らされているところでもあります。肉体は朽ちていくわけですが、私たちの霊・魂は、すぐに一瞬にして主の御元に行きます。第二コリント 5:8 にこう書いてあります。『私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。』肉体を離れたら瞬時にして私たちの霊・魂は、主の御元に行きます。つまり天国に行くということです。この地上で息を引き取ったその瞬間に私たちの霊魂は主の元に行くわけです。昇天するということです。

で、携挙の際には、その霊魂を入れる、入れ物となる新しい体が頂けるわけです。それは朽ちることのない栄光の体、御霊の体、いろいろな呼ばれ方をしていますが、詳しいことは第一コリント 15 章を見て頂きますと、特に後半

の部分です。50 節以降『⁵⁰ 兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。⁵¹ 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。⁵² 終わりのラッパとともに(携挙の時です。第一テサロニケ 4 章に出ています。)、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。⁵³ 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。』その前を読んで頂くと、それは“天上のからだ”とか、また“栄光のからだ”、いろいろな表現がなされております。それは一言で言いますと、復活されたイエス・キリストと同じ姿に変えられるということです。イエスはおよそ 33 歳で死に、葬られ、3 日目によみがえり、そしてその 40 日後には天に上げられいったわけです。それがイエス・キリストの栄光の姿です。その姿と同じ姿に私たちは変えられると。これもピリピ 3:21 に書いてあります。『キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。』

ですから、天に行ったらすべてのクリスチャンはイエスと同じ姿に変えられているわけです。およそ 30 歳位の体と想像して下さい。赤ちゃんで死んでも、30 歳位の成人した姿です。おじいちゃんおばあちゃんの姿で死んでも、天においては 30 代のキリストと似た姿に変えられているわけです。楽しみです。この子が大人になるのを見ることなく先立たれてしまった。親としては耐え難い悲しみです。子供が自分よりも先に死ぬ。死産してしまう。そういうやるせない気持ちも、天において、もう大きくなった姿で、その子が成長した姿でそこにいるんです。素晴らしいですね。もう晩年の姿しか知らない。年老いてよぼよぼしているその姿、もう寝たきりのような状態、その姿しか知らない、もう認知症になったその姿しか知らない。でも、イエス・キリストを信じているならば、その人は天においてはもう 30 代の元気な姿で見ることが出来ます。で、私たちはその姿を認識出来るわけです。天においてはお互いが誰か、瞬時にして分かります。その根拠というのは、イエス・キリストの姿が変えられた時、変貌するという言葉を使いますが、非常に高い山、ヘルモン山にイエスはペテロとヤコブとヨハネを、3 人連れて行ったわけですが、その時にイエスの御姿が真っ白に変貌した。その際にモーセとエリヤもそこに現れたわけです。モーセとエリヤ、イエスの時代からしたら 1500 年前の人と、また 600~700 年も前の人。当然ペテロとヤコブとヨハネは、モーセとエリヤの姿を見たことがないわけです。写真なんか残っていないわけです。ビデオなんかないわけです。でも瞬時にして、それがモーセ、それがエリヤだと、彼らに分かったんです。イエスの紹介もなかったわけです。「この人がモーセさんですよ。この人がエリヤさんですよ。」そのような紹介はなかったわけです。瞬時にして彼らは、それがモーセ、それがエリヤだと分かったんです。そのように天においては、一瞬にしてお互いが知覚出来るわけです。わざわざ名札を着けていなくても、ネームプレートを着けていなくても、自己紹介なんかしなくても、変えられた姿でお互いが認識出来る。素晴らしいですね。会ったこともないクリスチャンも認識出来るわけです。楽しみです。世界中に私たちの家族がいます。兄弟姉妹がいるわけですが、天においてはそれが誰か一瞬にして分かるのです。待ち遠しいですね。で、勿論私たちがよく知っている愛する兄弟姉妹たち、大先輩たちもそこで会えるわけです。そういうわけで、天国の話を今したいわけではないのですけれども、死の備えを私たちはしていかなければいけないということです。

具体的に勿論信仰面でしっかり備えていかなければならない面は、もう強調し過ぎても、し過ぎることはないということなんですが、具体的な、実際の面で今日は特にお話を進めていきたいと思っております。死んでそれで消えてしまうわけではありませんから、必ず死んだら日本の法律に従って遺体の処理というものをしなければいけないわけです。即ち葬^{すなわ}りということをしなければいけないわけです。具体的にはそれはセレモニーとして葬式などを行わなければいけないわけです。最終的には火葬をするようになるわけです。それは日本の法律で定められていますから、亡くなったらその遺体をどこかに放置していいという話ではありません。必ず少なくとも亡くなったら 24 時間経過した時点で火葬するわけです。勿論 24 時間後にきっちりでなければいけないわけではなくて、24 時間以内では火葬は出来ないということを言っています。そうした備えをしていく必要があるわけです。

葬儀というのは、いわゆる通過儀礼、イニシエーションと言います。なかなか私たちは人の死というのを、それが突然であればこそ受け入れることが難しいものであります。昨日まで元気だった人が、目の前から突然消えるわけです。そこに居るはずの人が、もう今日から居ない。今まで話していたその相手が、もう口も利けない。死人に口無し状態。温かかったその温もりはもう冷たくなって、まるで人間ではない。もうただの抜け殻のように見える。その現実をすぐには受け入れにくいものであります。実感が湧かないということです。もう悲しすぎて、もうとても死と向き合えないという人もあるわけです。そういう中であって、この通過儀礼にあたる葬式、イニシエーションと呼ばれるものは、死を受け入れるのに非常に役立つものと言えると思います。これを行うことで、確かにこの人は死んだんだと、自分にも言い聞かせることも出来ますし、他の方々もそれを勿論一緒に体験するわけですから、参列するわけですので、そこでいろいろな言葉もかけられたりしながら、死が確かだったと。これは現実であって、受け入れなければいけないもの、向き合わなければいけないものだという、その助けをするのが葬儀というふうにも位置づけられます。ただ、クリスチャンの場合は、それ以上の勿論意味があるということを皆さんはご存知かと思います。

こないだは、もう月曜日のことですからけれども、私たちの兄弟、Oさんの葬儀をしたばかりであります。そこに参列した方は、キリスト教葬儀はどんなものかは私は口頭で説明をしたのでお聞きになったと思いますが、プログラムに毎回私はキリスト教葬儀について解説する文を印字しております。で、それを今また読ませて頂きたいと思います。『キリスト教式葬儀について。(4項目あって、まず第一項目は)キリスト教式葬儀の目的。それは、キリスト教式葬儀の場合、葬儀は①個人への愛と敬意の表現。またその死を惜しむ想いの表明などとともに、②遺族に対する慰めと励ましを目的とします。(いわゆる仏教のお葬式とは違って、供養する目的は一切ありません。故人のための葬儀ではなくて、遺族のための葬儀だということです。で、次の項目は)神のみを礼拝する葬儀。①に関して言えば、それが行き過ぎて死者礼拝になると、天地万有の創造主なる神のみを礼拝の対象とするキリスト教信仰に抵触しますので、特に注意を要します。具体的は、遺体・遺骨・遺影などを拝んだり、香を焚いたりすることはしません。(偶像礼拝に抵触することは避けなければいけないわけです。これについてはQ&Aの時間で、仏式をはじめとした異教の葬式には、偶像礼拝のセレモニーも含まれている。例えば焼香等の場面であります。キリスト教ではそのようなことは一切致しません。で、3項目目は)聖書の教える死観・死後観。②に関しては聖書の教える死観・死後観が深い意味を帯びています。(②というのは遺族に対する慰めと励ましのことです。)死によって体と霊は分離し、体は土に帰りますが、霊はこれを人に授けた創造主なる神のみもとに帰ると聖書は教えています。多くの人が死に対して不安と恐怖と絶望を感じるのは、この神との関係が罪(その根源は自己中心性)のために破壊されたことが原因となっています。しかし神のひとり子イエス・キリストの十字架における身代わりの死と復活により、信じて罪を赦され、永遠の命を与えられているなら、死はもはや恐るべきものではなく、その意味と性格は一変し、永遠なる神の御国への入口となります。(これが福音であります。ですから、神礼拝とともに、福音伝道の機会ともなるわけです。で、4項目目は)希望にあふれた葬儀。このような信仰による希望がキリスト教式葬儀の特色となります。会葬者は個人を偲び、その生と死に深く思いを致すと共に、喪主や遺族の悲しみ・寂しさなどへの理解と共感に合わせて、この希望について留意するなら、より一層心のこもった弔慰が出来ましょう。霊は神のみもとに、という根本の意味を押さえて、プログラムの一つ一つの意味を理解しつつ、祈りの心を持って葬儀に参列することは、故人・喪主・遺族の為だけではなく、会葬者自身にとっても意義深い経験となるに違いありません。』と。

プログラムの中身の方にもこのように但し書きが付記されております。『すべてキリスト教式で行われます。故人の霊魂は天にあり、遺骸には拝礼を行いません。(日本人の癖でついつい遺骸に対して頭を下げてしまう。敬意を表するということでお辞儀をするわけですが、それは拝礼ということになれば、死者を礼拝するということになります。)式の最後に行く飾花は(献花とも言いますが、献げる花となっていますので、私はこれを敢えて飾花というふうに言い直しています。)、仏式の焼香や神道の玉串奉奠に代わるものと誤解されやすいものですが、死者の供養をするとか、冥福を祈るといったことではありません。(ほとんど誤解されています。大体、これは焼香代わりにやるもの

ですね、という認識で献花が行われるケースがほとんどであります、これを敢えてそういうものではないと強調するのであります。)これは祭壇や棺を飾り、生前の事を感謝する心を持って遺体の周辺を飾ることに参加する意味合いが込められているものです。ご参列される皆様に、主イエス・キリストの慰めと恵みと祝福がありますように。ご理解とご協力に感謝申し上げます。』と。こう書いてあっても、これを読んでも、日本人の染み付いた癖として、葬式仏教の文化の中で生きている者として、つつい癖でやってしまうという人は、大勢おります。ただ、敢えてキリスト教式の葬儀というのは、所謂仏式の葬儀とは意味合いが全く違うんだということを明確に打ち出しおく必要がありますし、これは葬儀の時に慌てて伝えるべきものではなくて、もうその前から元気なうちに周囲に対して自分の信仰を証しすると共に、「自分の葬式はキリスト教式でお願いします」と。で、「キリスト教式の葬儀というものはこういうものです。」と、ノンクリスチャンの方々には特にこの辺^{あたり}をお話しておかないと、勿論理解出来ないと思いますし、彼らの感覚で執り行ってしまう可能性がありますし、誤解を招いたり、つまづきを与えることにもなりかねませんから、いきなり葬儀の時に説明するのではなくて、もうその前から説明しておく必要があろうかと思います。

そういったことを示すためには、勿論口頭だけではなくて、文書にしても伝えておく必要があります。たとえば遺言という形、或いはエンディングノートというものも最近よく出ていると思います。市販のものもありますし、役所等ではエンディングノートの形を無料で配布しているところもありますし、またキリスト教のエンディングノートも出ています。今私の手元にあるのは、一つは『エンディングノート、愛する人に残す私のノート』という、これはキリスト新聞社の出している、日本。基督教団系のものです。で、もう一つは『キリスト教の終活、エンディングノート』これは、いのちのことば社、福音派の方で出しているタイプです。これも参考までに、もし興味のある方がいらっしゃれば中を見て頂くと、具体的に死に備えていく、葬儀に備えていくことの実際^{じつじ}というものが、そこに書いてあります。

で、もう一つは『新クリスチャン生活百科』という本の中にある遺言書の形ですけれども、ここに『私の遺言について。私が天に召された時は、下記によって教会で葬儀をして頂くよう事前をお願いしておきます。』ということで、緊急の連絡先。これは牧師などの住所・氏名・連絡先。そうした教会の連絡先といったことが書いてあります。で、バプテスマ・洗礼を受けた時の年月日。洗礼を授けた牧師の氏名とか、或いは愛唱聖句、皆さんが良く愛唱している、愛読している聖書箇所、或いは愛唱賛美歌・聖歌、そういった歌があれば、それも記す欄がございます。で、献体等の有無です。臓器提供したいとか、そういう献体を申し出ている場合の意思をそこに書きます。で、ご奉仕返礼の希望について。返礼品というものを大体葬儀に参列する方に配ったり、お返しするというのを致しますけれども、それをするか、しないかというものも必要です。御花料(所謂香典とか御霊前にあたるものです。)を辞退するとか、そういったこともあります。また、具体的にどうい返礼品にしたいのかということも、最後の証しの場としてそれを活用するということも、いろいろ書く欄がございます。教会のお墓の方に納めて欲しいとか、いろいろ書く欄がございますので、皆さんもそうしたものを作成しておく^と残された者たちは、皆さんの意思がハッキリ分かって、それを尊重してくれると思います。あとは、経歴の面です。所謂個人の略歴という形で紹介する面、それもある程度自分でまとめて下さってであると家族は楽です。亡くなってから急にそうしたことを準備するよりも、簡単なもので結構ですので、どこで生まれて、家族が何人いてとか、自分の職歴とか、経歴とか、自分自身が大体伝わるようなもの、信仰歴も含めて、そういったことをまとめておく必要があろうかと思ひます。葬儀用の写真も出来れば用意して頂きたいと思ひます。これも結構慌ててアルバムから探し出すとか、最近撮った写真がないとか、なかなかいい写真がないとか、いろいろなことで、突然のことですとパニックを起こしてなかなか準備が大変だということもありますから、わざわざ葬式用の写真を撮るという人もありますので、その辺も具体的な準備として必要かと思ひます。

あとは教会によっては葬儀申込書というものもありますし、この教会ではそういう事は特別正式にしていますが、口頭で「お願いします。」という事は複数の方に言われておりますけれども、そういったものも文書に残しておきますと、残された者たちがそれを見て尊重してくれるかと思ひます。そういうことが必要な方はまたおっしゃって下さい。

聖書において葬儀というものは、実際に教会等が責任を持って行っていると言うよりも、遺族が行っているということが大体の事例であります。例えば**創世記 35:29**にそれを見ることが出来ます。『**イサクは息が絶えて死んだ。彼は年老いて長寿を全うして自分の民に加えられた。彼の子エサウとヤコブが彼を葬った。**』2人の息子が父親を葬ったということです。ですから、基本的には葬儀というものは、遺族がその責任において行うものです。身寄りがなければ当然教会ですから、私たちは神の家族ですから、私たちが責任を持って行います。勿論教会にお任せ頂ける面もあるんですけども、ただ意識を持って頂きたいのは、基本的には葬儀は遺族が責任を持って行うものだということです。で、その遺族をフルサポートするのが教会というところでもあります。お墓に関しても同じです。アブラハムは、妻のサラが亡くなったら、わざわざ遊牧民だったにもかかわらず、ちゃんと墓地を設けたわけです。マクペラというところに妻のための墓地を作って、そこに自分も葬られて、家族も葬られていくようになります。家族の墓がそこに備えられるわけです。それを用意したのはアブラハムです。天幕生活をしていながらも、テント生活、遊牧民の生活をしていながらも墓地だけはちゃんと用意したわけです。新約聖書においてもイエスの親友のラザロも死んだら墓に葬られました。勿論イエス・キリストご自身も死んだら墓に葬られたわけです。神の子ですら死んだら墓に葬られたわけですから、私たちも死んだら墓に葬られるのは自然でありますし、当然です。ただ、墓にどうしてもを葬らなければいけない、とは聖書には命じられておりませんので、「私はもう死んだら灰にしてもらってどこかに撒いてもらいたい、散骨してもらいたい。」そういう希望も勿論あるかと思います。ただ、墓を設けるというのは、これは普通のことであって、自然なことでもあります。

よく言われるのは「**クリスチャンは先祖を大事にしない。墓参りもしないし、仏壇にも手を合わせないし。**」それは誤解であります。むしろ聖書においては、ちゃんと葬りもします。葬式も行いますし、ラザロが死んだ時も葬式は行われておりました。そこにイエスも行ったわけです。墓もちゃんと作ってそこに葬るわけです。お墓参りという形で死者を礼拝することは致しません。供養もしません。冥福も祈りませんが、墓を大事にする、管理する、それは常識でもありますし、聖書的でもあるわけです。先祖を大事にしないどころか、先祖を造られた創造主なる神を私たちは誰よりも何よりも最も重要な大切なお方として礼拝を捧げるわけです。ですから、先祖を大事にするならば、先祖を造った神を大事にしなければいけないということを、私は普段から伝えております。

そして、これより具体的な話に移していきたいと思います。日本人の 5 人に 4 人は病院で死にます。81%の人が病院で死ぬわけです。これは欧米諸国と比べてかなり高い数値であります。欧米では大体 50%、半分ぐらいの人が病院で死にますけれども、例えばフランスでは 58.1%、スウェーデンでは 42%、イギリスでは 54%、アメリカでは 56%、一番低いのは欧米諸国ではオランダで 35.5%です。その中であって先進国の日本は 81%。これはかなり特異な特別な数字と言えらると思います。高齢化も進んでおりますし、そして延命治療というものも進んでおります。自然に亡くなるのが一番私は理想だと思っております。胃ろうをしたり、いろいろな管をつないで、いろんな処置をして、ベッドに寝たきりの状態で虫の息でいつまでも生きている。その姿を見るのは忍びないです。それは勿論周りの家族が判断することではありますけれども、それよりも私は出来たら自然のままに死ぬ、クリスチャンは神のもとに帰るわけですから、この世にしがみつくと必要は全くありません。勿論最後の一息まで神を誉め讃えながら、イエス・キリストの素晴らしい福音を宣べ伝えることが出来れば、それは幸いです。生きた証しとして、口が利けなくなった状態でも、見舞いに来る人が却って励まされて、彼らが神の慰めを受けたり、彼らが初めてイエス・キリストの福音を聞くということになれば、勿論生きている甲斐があると思います。虫の息でも、惨めな姿になってもです。病と闘いながら、痛い思いをしながら、苦しい不自由な思いをしながらでも、そこには意味があると思います。でも、そうでないならば、ただ周りが長く生かしたい、死んでもらいたくないから、ということだけではあまりにも不憫^{ふびん}だと思います。いずれにしても、病院で亡くなるケースが殆どだということは皆さんも体験的に知っていると思います。家で亡くなったり、施設で亡くなったりすることも勿論あるわけですが、大抵の場合は病院で亡くなります。家で何かあってもすぐに救急

車が来て、病院で死ぬということが多いわけです。

今から話したい事はその病院で亡くなったりした場合、(家でもどこでもいいんですけども、)危篤状態、重体になったらまず皆さんは、クリスチャン・ファミリーだったら当然のことですけれども、真っ先に牧師に連絡をして下さい。そうしたら牧師がどこかに遠出していたら仕方がないかもしれませんが、少なくともすぐに牧師は駆けつけます。それが病院であろうと、家であろうと、施設であろうと、時間が深夜であろうと、明け方であろうと関係なく。そういうケースもあって私も行って、祈って、癒されて持ち直すということも度々ありました。そのまま亡くなるというケースも勿論ありましたけれども、ノンクリスチャンの家族ばかりであった場合は、その辺はいろいろ難しいと思います。赤の他人の牧師が身内の危篤状態にしゃしゃり出てきて一体何のつもりかと思うかもしれませんが、その辺も皆さんも是非伝えておいて頂きたいと思います。「もし、自分に何かあったら、すぐに牧師を呼んでくれ」と。勿論祈って神様の御心を求めながら癒されればそれで良、亡くなってもすぐにその場で『昇天式』ということが行なえるわけです。もう体を離れた靈魂は、父の御元に帰るわけです。その時点で、その死んだ現場で、病院のその病室で『昇天式』ということが出来るんです。勿論これは牧師不在でも出来ることですが、それが出来ます。

その後、当然近い近親者に対して一報入れる必要があります。ある程度まだ持つようであれば、勿論牧師の連絡だけではなくて、たくさん自分の兄弟とか、家族とか、親しい友とか、お世話になった人とか、最後にひと目見て、そしてお別れをしたいというような方もいらっしゃると思いますので、そういった方々にも連絡をしておく。で、その方々というものも ^{あらかじめ} 予めもう用意しておく必要があります。慌てて「誰に電話しようか。誰に連絡すべきか。」そこで迷うことなく、「もうこの時には〇〇の人たちに電話します、連絡します。」と、名簿等を作っておけば楽だと思います。連絡し忘れるということも避けられるわけです。迷うこともないわけです。大体そういう時はパニックを起こしますから、なかなか住所録を見たりとか、いきなり年賀状をひっくり返して連絡すべき人は誰だったのか、昔の名簿を引っ張り出してきてとか、そういう必要性は無いわけです。予め準備しておけば、もう落ち着いて対応出来ます。

亡くなった場合は必ず、誰がどのようにどこで亡くなったのかということを端的に。詳しく話す必要はありません。勿論その時感情的に取り乱す必要があると思いますけれども、でも大切な情報を、要点をちゃんと押さえた上で伝えないと、ただ取り乱すだけで何を言っているのか分からない。周りもすぐに対応しなければいけないわけですから、動いてもらうためにもちゃんと要点を押さえて、病院の住所などもちゃんと押さえておいて伝えておく必要があるかと思います。

葬儀に関してキリスト教式で行うということを今から前提でお話をしていきますので、仏式とかまたは他の形態でやるということ無しに、キリスト教式で行うということで話を進めていきたいと思います。勿論他の宗教でも、他の無宗教の家族葬・密葬でも重なるところはありますが、牧師が呼ばれておりまして、そしてその後、もし葬儀社を介して葬儀を行うということであれば、葬儀社にも一報入れておく必要があります。遺体の処置にすぐに入りますので、病院の場合は看護師さんたちが亡くなった方をきれいにし、いろいろ処置が必要なわけです。体をきれいにするだけではなくて、着替えをさせたり、化粧をしたり、またいろいろ体液が出ないように綿を詰めたりとか、或いは口を閉じるようにするとか、体も固まっていきますから体勢をきれいに整えとか、まあそういうことを致します。大体パジャマとか浴衣を着ているような浴衣の状態ですので、出来ればその人が普段着ていた服とか、「どのような服でも結構ですから用意して下さい。」ということも言われますので、そういった服を着せておくとか後で見ると、偲ぶことが出来ると思います。浴衣の格好でいるよりも、普段の格好、それをしていて偲ぶのに助けになると思いますから、手間ではなければそういったものも、もう準備出来るようであれば、突然事故や災害で亡くなった場合はそこまでは難しいかもしれませんが、ある程度もう年老いているとか、もう病気で進行が進んでいつ亡くなってもいいという状態であれば、そうしたもののまでも用意しておくとか良いかと思います。もう病院に置いておいても構わないと思います。緊急で運ばれる場合はなかなか対応出来ないと思うので、一旦病院で処置してもらったら、遺体を家に搬送して、家で着替えも

出来ますから慌てる必要はありません。

勿論臓器提供をしたいという場合であれば、そういった事はなくなるわけですが、検体を希望しているとか、そういった事であればそのまますぐに処置に入ります。或いは事故とかの場合、災害の場合は、警察が入りますから、そこでもすぐにはそういう対応は出来ないわけです。所謂検死が行われるわけです。

葬式の場合は、まず病院で亡くなった場合(家でもいいですけども)牧師が呼ばれたらそこで『昇天式』というセレモニーを行うことが出来ると先程言いました。その後『前夜式』(所謂お通夜にあたるもの。)それを行う人と、それを省く人があります。キリスト教においては『前夜式』、お通夜にあたるものは必要ありません。ただ日本の葬式仏教の伝統で通夜にあたる『前夜式』が必要だと考えている人たちがいるわけです。なかなか葬儀には参列出来ない。2 回に分けてもらうと日中仕事をしている人はなかなか葬儀に参列しにくいので、夜であれば、所謂その『前夜式』の夜の時間帯だとお別れに行けるのでということで、そういうことで近所の方とか仕事関係の方は、2 回に分けられていると参列しやすいと。1 本に絞ると、所謂葬儀だけですと、夜行われる事はありませんので、大抵は昼間です。火葬の関係で昼間行われることが多いので、その場合は 2 回に分けられていると、参列者には都合が良いわけです。ですから、『前夜式』の意味というのは、あくまでこれは参列者、所謂お客さんのためのものだと。というのは、遺族はもう疲れ果てているわけです。ですから、キリスト教的にはお通夜なんていうものは全く^{まったく}以て遺族を苦しめるだけのものです。昔のお通夜は、遺体に寄り添って一晩中寝ていなければいけないとか、見ていなければいけない。遺体に寄り添っていなければいけない。もうただでさえ愛する人を失って悲しみに打ちひしがれて、それまでも眠れない日々が続いて体力的にはもうピークに達しているのに、通夜をやるなんていうのは酷な話です。私は、出来たら休んで下さい。前夜式がなければそれに越したことはない。セレモニーを行わなくても大丈夫です。遺体をもし自宅に運ぶという事であれば、その時点で来たい方は、夜に顔を見に来て頂くと。で、そこで是非式をして欲しいという事であれば、自宅で私は司式を行うことも喜んで致します。極力遺族に負担のないように、簡素な形で行います。食事を振舞うということも避けて頂くように。軽食とか、失礼に当たるから折角来て頂いた方にはお茶とか、お菓子を出したいという気持ちも勿論あると思いますから、そういう気持ちにも応えたいと思うので、そこは出来る限り教会の方でもサポートして、遺族に全てそれをさせるということは避けるように。キリスト教式の場合は、私はそのことを心がけております。

その後、棺に収めたりするのにも『納棺式』というのを行います。これは、『納棺式』のタイミングというのは、『前夜式』の前とか、或いは『前夜式』を行わなければ遺体を病院なりから自宅に運んできたその時点で棺が用意されて、そこに収める。その時には牧師が立ち会って『納棺式』というセレモニーも行います。立ち会える人があればのことですが、それはしてもしなくても勿論構わないものですが、それも出来るということをお伝えしておきます。

で、その流れで行きますと、最後は葬式の後で火葬場に行って『火葬式』というのを行います。ですから牧師は必ず火葬場まで行きますので、そこで火葬があって、そしてその後骨壺に焼かれた骨が収められて、最終的には墓に葬られるわけです。それは『納骨式』とか、『埋骨式』と呼ばれて、或いはお墓の前で行うことなので『墓前礼拝』などと、いろいろな呼び名がありますが、それも牧師が立ち会って行います。それが 1 連のキリスト教式のセレモニーです。ですから、まず亡くなった時点で『昇天式』があり、そしてその後棺に納める『納棺式』があり、そして『前夜式』を行えば『前夜式』。それは家でも出来ますし、どこか会場でも出来ますし、当然教会でも出来ます。やりたい方に応じてです。なるべくでしたら休んで頂きたいので、負担の無いようにということ。お金もかかることですし、そういうふうに私は勧めております。

そして、いわゆる本葬にあたる『お葬式』それも自宅でも出来ますし、どこか葬祭センターの公営しているホールでも出来ますし、本当にお金をかけたくなければ自治会館とかでも受け付けてくれます。どこかの公民館とかでも大丈夫です。その場合は、近所の方をかなり呼ばなければいけないと思います。或いはその市民でない別の地域の公民館、例えば私たち教会が〇〇の地区センターをクリスマスの礼拝に借りているように、申し込んで断られる場合もありますから確認をしておけば、そうすれば地域の方は呼ばずに広いところを安く借りることは、それは可能です。

そこで『お葬式』が出来るという条件であればです。

勿論そういったセレモニーは一切省いて、所謂直葬。亡くなったらもうすぐに火葬場に直行して、そこで『火葬式』のみをするという、所謂密葬にあたるもの。これも可能です。家族葬というのが最近流行っていますけれども、一切宗教を入れないで家族だけでやるというのは、これから主流になっていくと思います。そしてどんどんお寺もつぶれていくと思います。キリスト教式でも、家族葬にあたるものも行います。ただ、クリスチャンの場合はそれは証しの場とも考えていますし、礼拝の場とも考えていますから、あまり消極的な形で捉えずに、積極的に、お金はかけずに、神の栄光を最大限表すことが出来るようにというのが、私のコンセプトであります。

まず葬儀を行うにあたっては、これは火葬も含めてですけれども、4つのことが最低でも必要になります。4点セット、これがどのケースでも必ず必要不可欠なものとなります。それは火葬費、火葬する費用です。東京周辺では、殆どもう公営が少なくなって私営ばかりです。ですから、それぞれ私営の火葬場で申し込みをして、結構高いと思います。でも、長野辺りだったら、もう皆公営です。市営とか村営とか、そうやって公に営業されているもの、運営されているものが殆どです。長野市に私たちは住んでいますから、今、長野市のお話をしますと、市役所に行ってそこで予約をするわけです。費用も、斎場というところで、そこで払うわけですが、葬儀社を入れるとその辺は自分でなくても、全部代行してくれます。勿論有料ですが、ですから、もう一切何も私たちはしないで全部任せて、一任して楽にいきたいという事であれば、葬儀社を入れるのがベストです。そうでなければ、お金をかけたくなければ、亡くなったらすぐに、病院であればお医者さんが死亡診断書を書いてくれます。で、死亡診断書とセットで死亡届というのがあって、そこに亡くなった方の本籍を書く欄、そして届け出をする方の住所氏名、印鑑とかも要りますけれども、そういったものを書いて、それを市役所に持って(支所でもいいです。)時間帯によって開いているところ開いていないところがありますが、市役所であればいつでも受け付けてくれます。夜中でも大丈夫です。で、そこで届け出をするとともに、そこで火葬の許可書、埋葬許可書、そういったものの申請をするわけです。その辺はそんなに手間ではないと考えれば、自分で出来ることです。で、松本の方の斎場、市営の斎場は、松本市民であれば無料です。広域豊科葬祭センター、豊科地域の人たち、その中で安曇野の市民であれば、やはり火葬費用は無料です。火葬費用は無料ですが、待合室を利用するのは有料であります。参考までに長野の場合は、ホームページに載っていますけれども大峰斎場というところは、12歳以上の遺体であれば長野市民は1万5,000円です。それが火葬費用、最低かかります。市民以外であれば4万5,000円です。12歳未満であれば長野市民は一体8,000円、そうでなければ2万7,000円です。で、松代斎場は安い。12歳以上は8,000円、大峰の約半額です。そういった値段がありますので、勿論斎場がいっぱいであるというケースもありますから、その辺は確認する必要がありますけれども、で、大峰斎場には霊安室、それは冷蔵庫です。遺体をちょっと置いておくために冷蔵庫もあります。一体12時間につき長野市民の場合500円です。これは空きがあるかどうかを事前に市役所に問い合わせをする必要があります。その上で予約を入れるんですけれども、すぐに葬式に入れないという時、ドライアイスを使って、1日10kg分位使います。これも葬儀社で用意してくれるものもありますから、任せれば楽ですが、自分で用意したいという場合は、ドライアイスをどこかで買い求めるわけです。葬儀社の場合は1万円ぐらい軽く取りますけれども、普通の製氷店とかで、タウンページを調べれば出てくると思いますので、それで1日大体10kg分。ですから、それをどのくらい遺体を置いておきたいのかということで購入することが出来ます。数千円の話ですから安くはあがると思います。で、霊安室もあるので冷蔵庫に入れることも出来ます。これを一般の葬儀場とかで、霊安室で置いておくと、1日数万円という金額ですから、500円でできたら一番安いわけです。これは大峰斎場のみです。松代斎場にはそれはありません。大峰の場合は、あと碎骨もお願い出来ます。焼いた骨をパウダー状に灰にすること、そういうサービスも行っています。一体につき2,000円です。全部碎骨にするのか、1部分だけを細かくしたいのか、それは要望が出来るそうです。分骨証明書というのをちゃんと出してくれるので、どういうふうに焼いて欲しいのかということをやちゃんと事前に市役所で申請する、或いは葬儀社にその旨を伝えておけばそのように申し込んでくれますので、

そうすると+2,000 円でそういうサービスが受けられるということです。それを散骨に使うと言うと難色を示されますけれども、法律で規制がないので別にそれは可能です。「散骨のために粉骨にしたい。」それを口にすると「ちょっとそれは。」なんて言い方をされると思います。でも、それを規制することは、今、法律的にはないので、骨が多すぎるから焼いて容積を少なくするという意味で彼らはサービスを行っているということなんですけれども、その辺はいろんなサービスがあるということも頭に置いておいて頂きたいと思います。

それで、火葬費用+今度は^{ひつぎ}柩になります。柩、お棺にあたるもの。これも火葬するためには必要不可欠なものです。これも葬儀社で買うことが出来ます。もうピンからキリまで、高いものは 10 数万円したり、安いものであっても数万円するものもありますし、なかなか数千円のものは提供していないと思います。後でその辺の話もしたいと思いますが、ちなみに長野市役所の方でも買うことが出来ます。葬祭具使用料というのがあります。いろいろ仏式で必要な祭具というものも売ってくれます。キリスト教の場合は、そういった祭具は必要ないので、所謂柩だけで済むわけです。柩に関しては、長野市の場合ですけれども、仏式 1 号というのが 1 万 7,000 円です。仏式 2 号はやっぱり 1 万 7,000 円。仏式 3 号も 1 万 7,000 円。いろいろ形やデザインが違うんです。仏式 4 号は 1,300 円です。ですから 1,300 円でもいけるわけです。そんなに大差はありません。布張りの物とか、いろいろ華美なものを求めれば他で買う必要があります。勿論インターネットで今は買うことも出来ますし、これは亡くなってからでないと買えないものではありません。今でも市役所に行けば事前に買うことが出来ます。その代わり自分で運ばなければいけないので、それなりに大きな車を用意して頂いて、今のうちにもう家に置いておくとか、それも可能であります。手作りはダメなようなので、壊れたりするといけないということが言われているので、でも最近はダンボールでできたものとか、環境に優しいとか、インターネットでもいろいろなものが手に入ります。

骨箱も売っています。葬儀社で買えばそれも結構な額を取られますが、市役所の場合は 2,600 円。その次が 650 円、一番安いのが 400 円です。骨箱は、これは決まりが無いんです。ですから、自分の家の花瓶か何かでもいいんです。それは何の法律の規制もないので、ガラスの瓶でも何でもいいんです。箱でも何でも。ですから、騙されないで頂きたいと思います。そうではないといけないというわけではありませんから、もう葬儀に入りますと、全然どうしたらいいか分からないので、言われたままにただ従う。「これが必要ですよ。」と言われれば、「ああ、そうですか。」なかなかオプションも提示されないわけですけれども、今の話は全部自分で揃える場合のケースであります。でも、それは長野市でも提供しているということです。

もう一つが霊柩車です。キリスト教の場合は、霊はもう既に天に上げられていますから、ただ『**柩車**』と言います。霊柩車とは普通言いません。ただの『**柩車**』。その霊柩車も勿論葬儀社を介してレンタルすることも出来ます。運転手が勿論つくわけですが、亡くなった場合、病院にまず行くわけですが、その時には霊柩車は要りません。寝台車で大丈夫です。ただ、その際には必ず死亡診断書というものが必要になります。勝手に遺体を動かすことはできません。自分の車でも動かすことも出来ます。その場合でも必ず死亡診断書が必要です。それがないと、ちょっと警察に捕まった時に遺体が車にあるわけです。説明がちょっと厳しくなると思いますから、お金をかけたくなければ、何でもかんでも霊柩車を頼まなければいけないのではなくて、タクシーでも大丈夫ですし、遺体を運べる大きさのものであれば、寝かせた状態で行くと。家までは充分対応出来ます。ただし、火葬場に行く時には霊柩車が必要になりますので、その時には長野市でも貸しております。長野市民であれば、1 運行当たり 7,000 円です。これは病院から自宅も大丈夫です。それも 1 運行という扱いで 7,000 円です。で、自宅から例えば斎場まで、それも 1 運行ですから 7,000 円。とにかく 1 運行という区切りで 7,000 円です。市外への運行は往復 10 キロ超えた場合は、1 キロ毎に 230 円加算ということになります。長野市の場合は 2 台しかないのです、すぐに予約して使わせてもらうという事は、必ずしも可能かどうかは確約出来ないということなので、その辺もスケジュール的にどうかということ。霊柩車というのは別にすぐ必要なわけではありません。どうしてもこの『**柩車**』というのが、長野市役所に 2 台しかないという中で借りられないということであれば、この分だけ葬儀社に依頼することも可能です。霊柩車だけお借りしたいですと。運転手がちゃんと来てくれます。それも可能です。そういうことが必要になります。

ですから、今言った4点です。火葬費用、柩、そして骨壺・骨箱(それは何でもOKですし、専門のものも市役所でも売っています。)ですからその辺は、葬儀社を介して買うという、それもセットに入ってますと。互助会に入っていてその基本料金の中に含まれていますということもありますから、その辺は互助会に入っている人はその内容も勿論知っていると思いますので、今言った事は自分で用意する必要はありません。でも、それを使わずに自分でやるということであれば、いくらでも手があるということです。ですから、長野市の市役所の斎場対策室というのがありますので、そちらの方に詳しい事は問い合わせをして頂いて、市民課の方ですべてのそうした受付は致します。戸籍係のところに行って火葬の料金を払う。或いは棺桶を買うお金、骨箱を買うお金。そこで窓口でお金を払って領収証もらって、そして業務室というところに行くとそれらを受け取ることが出来ます。ですから、ちゃんと運べるだけの車を用意してくる必要があろうかと思います。それさえあれば極端なことを言えば、葬式は出来るということです。火葬費と棺桶、そして骨壺なり骨箱、そして柩車(霊柩車のことです。)、これさえあれば葬りは法的に全部クリアして、可能だということです。もう本当にお金をかけたくなければ、それさえあれば充分ということですから、大体皆さん費用が最低限どのくらいかかるかは、想像ついたかと思います。それが所謂直葬、火葬だけを行う葬儀というものです。

でも、大抵の方はそれはしないと思います。家族があればこそです。身寄りが無いとか、或いはもう生活保護を受けてもう全然経済的に余裕がないという人は、こういったことも考えなければいけないと思うんですが、そうでは無い場合は、一般的な流れに従って行くと思います。その一般的な流れというのを今からちょっとお話ししていきたいと思います。

まず、亡くなったということを(牧師はその前に呼ばれているという前提で言いますと)その連絡をしなければいけないということを先程言いました。連絡すべき人をちゃんと押さえておくということです。

その次に喪主を決めなければいけません。遺族の代表者、その人が窓口になっていろいろな細かい打ち合わせをしなければいけません。これが決まらないうちになかなか前に事が進まないの、まずは葬儀の代表者となる、打ち合わせ相手となる喪主を決めなければいけません。

次に葬儀の日程、場所を決めなければいけません。これが葬式においては一番大切です。これが決まらないうち連絡のしようもないという場合もあるわけです。家族とかは「もう亡くなりました。」ということでもいいんですけど、ただ、葬儀に今度参列するという方は、亡くなったという情報だけではなくて、実際にいつ葬儀を行うのか、場所も聞いておかなければいけないわけですので、ここを打ち合わせで決めていくということです。参列者の大半が遠方から来る、「もう身寄りには近くにおらず、近親者はもう皆県外です。」とか、「遠くに住んでいます。」という場合は、その人たちのことを考慮する必要があるの、すぐに葬儀には入れないと思います。彼らの予定を聞きながら決めるということも必要で、遺体はどんどん腐敗していきますので霊安室を活用するか、或いはドライアイスを増やしていくか。夏場であるとか、いろいろな条件がありますので、クーラーを効かせるとか、いろいろな対応をしなければいけません。

日時を決める際にもう一つこれが決め手になるのは、火葬場の予約状況です。火葬場が、斎場が「もう予約でいっぱいです。」という場合は、こちらの都合では決められないわけです。ですから、火葬場の方を、自分でやる場合は先程お話しした通り市役所に電話をするわけです。自分で全部やらないで、葬儀社任せにしたいということであれば、葬儀社が全部その辺は、今はスマートフォンで予約状況を見れますから、スマートフォンで予約出来るんです。そういうことで火葬場の方、長野市の場合は大峰斎場と松代斎場2ヶ所ありますので、他の自治体もそういったところを見て頂いて、正月等の休み明けは物凄く混んでいますから、すぐには大体難しいと思います。大混雑しています。あと友引を休みにしている地域もあります。こないだOさんの葬儀をしましたけれども、上田の方では、未だに友引は火葬場休み、というところがありますので、注意が必要です。今は大体そういったものに囚われずに、友引でも運営している斎場の方が増えていると思いますけれども、田舎によっては、友引はやっていないというところもあります。ただ2カ所あったので、そのもう一方の方が友引でもちゃんとやっていたので、今回は出来たということなんです。そういう火葬場の混雑状況でまた予約を入れて、逆算して、葬儀の日程が決まっていくということです。

場所なんですけれども、自宅でも出来ます。勿論教会でやりたいというケースもあると思います。今この教会ですと、柩が入るスペースはかなり厳しいかなと思っていますけれども、でも入らないとは思いません。窓を開けて入るとい感じになると思いますが、ギリギリ入るかかどうかというところです。入らなければ遺体だけ出して、遺体だけ中に入れて、棺桶にあたる柩はこの中に先に持ってきておいて、そしてここでの対応は出来ると思います。あとは駐車場の関係です。公共の施設。これも勿論自治会館も使えるということを言いました。公民館とか、地域によっても葬儀を挙げさせてくれるところもありますし、葬儀会館(所謂葬儀社のホール)を使うということも勿論可能であります。そういう専門の式場を借りるのが一番楽ですけども、一番お金がかかるということです。

そういったことが決まったら今度は3番目に決めることとして、式の内容です。キリスト教式であるという事はもう言っていますので、その内容と言うのは規模のことです。出席される、参列される方の人数。大体これも予測しておかなければいけません。密葬とか家族葬は例外として、どのくらいの人を呼ぶのか。それによって場所も大きな部屋を借りなければいけないわけです。大体祭壇というものは使いませんので、強いて言えば『花祭壇』という形になります。キリスト教式の場合は、仏教の祭壇は使いませんから、花で大体飾るわけです。それを『花祭壇』とも言いますが、それが大体部屋の大きさによって入るものを使うということになりますから、そういった花の手配、それが一番お金がかかる部分です。キリスト教式の葬儀で一番お金がかかるのは、お花の代金です。これも葬儀社が全部パンフレットでカタログから決まったものを提示してくれますけれども、教会でやる場合は葬儀社も勿論入って手配することも出来ますが、お花屋さんに直接依頼することも出来ます。中間マージンが取られないので、低価格でかなり豪華なお花を用意することも可能かと思えますし、勿論華美にする必要はないです。質素にいきいたいということであれば、お花を2・3基用意するだけでも良いと思います。勿論お花を贈りたいという方もいらっしゃるでしょうから、それも足していと思います。キリスト教式の場合は、所謂供えという事を致しません。供え花というのはありません。ですから、もう名札も付けずに、名札は敢えて言えば芳名板というところが出入り口にありますが、そこに付けさせていただきます。会社関係とか、お世話になっている人とか、失礼に当たるのではないかという指摘もありますけれども、芳名板に名前をちゃんと入れておけば、特別問題は起こらないかと思えます。送られた花もそういった意味では祭壇として、一部として利用することも可能だということです。

あとは、参列の方々に感謝の気持ちとして返礼品というものも用意しなければいけません。それもいくぐらいにするのか内容等も、クリスチャンの場合は所謂一般的なものでも良いと思います。何か御言葉の入ったもの、それは葉書なり、タオルなり、ハンカチなり、いろいろなグッズもあります。トラクトとか小冊子にあたるもの、今回もそういったものをOさんの葬儀では含めて入れましたけれども。いろいろな返礼品がありますので、それも予め用意しておくと思えます。勿論その数も用意する必要があるかと思えます。

あとは写真です。これもまともに頼むと結構高いです。所謂遺影用の写真というと何万円も致しますが、自分たちでも用意出来ます。大きく引き伸ばしておけば、それで良いわけです。或いは最近ではモニターを使って、大きな画面のテレビなんかも使いますから、別に写真を作ることもないです。モニターを式場に置いて、そこに大画面で顔が映ると。そういった使用も可能だということです。そうすれば写真代は一切かかりません。

『前夜式』を行う場合であれば、前夜式用のプログラム。そして、葬式用のプログラム。2つ作らなければいけません。前夜式はなるべく行わない方がいいというふうに言っていますが、それは遺族のためということで、遺族が希望ということであれば喜んで致します。通常は小規模になろうかと思えます。ですから、手短に簡素なプログラムで行います。

で、『葬式』は大体礼拝という形で、賛美と聖書の御言葉が中心です。祈って行くということですので、勿論これも長くはできません。火葬の予約時間というのがありますので、それによって葬儀の時間も決まってくるので、大体1時間ぐらいが目安であります。その中でプログラムを組んでいくんですけども、この教会では私と妻でプログラムは組んでいますけれども、教会によっては葬儀委員長というのが立てられて、会社でもそういう社葬等でも葬儀委員長とかがあつて、その人がいろいろ手配したりするということをやりますが、この教会では全部私と妻の方でプログラ

ムの作成からなにか全部やっておりますので、賛美歌の歌詞を印刷するとか、大抵の教会では牧師以外の人がそういった細かいプログラムの印刷とか、または賛美歌の印刷とかは致します。

その際に愛唱歌があれば、「故人はいつもこの歌を歌っていました。」とか、或いは愛読聖書箇所「故人はこの聖書の箇所が大好きでした。いつも口ずさんでいました。事ある度にこれを言っていました。」とか、所謂辞世の句に当たるような聖句があれば、そうしたことも式のプログラムの中に盛り込むことは出来ます。

私が大事にしているのは、あくまでキリスト教の葬儀とは言え、遺族の慰めというものが重要になりますので、単なる伝道集会で終わらせたくないということです。どうしても遺族が伝道して欲しいと、今回 O さんのケースはそういうリクエストがあったんですけども、でも葬儀はやはり伝道集会ではないんです。神を礼拝しながら、亡くなった方のその悲しみ・喪失感、そこを慰めて平安と希望をもたらすことが司式者としての第一義の務めだと私は認識していますので、あんまり伝道を前面に出して、遺族そっちのけでやるというのはどうかと思っております。ですから 4 番目の項目としては、私は「すぐに休んで下さい。」と言います。こういう事はあまり言われなと思います。休息をとって下さいと。遺族にとってはもう長い一日なんです。もう病気を抱えている人をずっと看病してきたということであれば、眠れない日々が続いているわけです。先程も言っている通り、もう体力の限界にきているわけです。もう感情的にも、情緒面でも、精神面でも、もう気を張ってはいるとは言っても、自分が思っている以上に疲れているんです。ですから、とにかく体を横にして下さい。「もうあまり考えなくていいですから。いろいろ気を遣って、あれをしなければ、これをしなければ、接待をしなければいけないとか、一切考えなくていいですから。そこはもうお休み下さい」と。それが、私が大切にしていることであります。その分、牧師の私がカバーして、そして教会の皆さんにもお手伝いとかサポートをお願いしているところであります。勿論葬儀社を入れれば、葬儀社がカバーしてくれる面もありますけれども、キリスト教式の葬儀というのは個人の供養を目的としていないので、あくまで遺族の慰め、彼らが本当に慰められるように。そのことがひいては神の栄光を表す、神を証して、神を誉め讃えることに繋がれば一番だと、私は考えております。

葬儀のプログラム以外で言いますと、先程、『^{しづか}飾花』ということを行いました。これも『献花』とは言わずに『^{たむ}飾花』言いますが、ポイントとしては故人に手向けるというわけではなくて、これは遺族の慰めを目的としていますから、お花は大体遺影に向けて献花という形になってしまうとそうになってしまうのですが、私は花は遺族の方に向けて手向けるというのが良いと思っていますので、(知らないでやってしまうケースもあります。今回も最初の時点で知らないで献花台というものがもう柩の前に置かれて、上田の方の風習ではもう先に焼香して帰ってしまうということなので、献花台というものが亡骸の前に、棺桶の前に置かれて、そこにどんどん人が行って、所謂お参りをして、焼香代わりに献花をして帰るというような方もあったので。本当はそれは避けたいのです。)出来る限り、式そのものに参列して頂いて、『^{たむ}飾花』という時には花は遺体の方、或いは遺影の方に向けるのではなくて、遺族の方に向ける。参列者側に見えるように置くということが望ましいです。で、それも勿論大体どんな色でも結構です。多くは白のカーネーションが使われますけれども、故人が好きな花があればそれを使ってもらうと。色も指定があれば明るい色で結構です。大抵洋花が使われます。菊は殆ど使いませんが、洋花が大体使われます。その季節によって流通している花もいろいろあると思いますので、高くない花を使うのが一番理想かと思いますが、使い回しも出来ますので人数分全部用意しなければいけないという事はありません。最終的にはその花祭壇のところに飾ったお花も合わせて棺の方に納めて、頭のとっぺんから足のつま先までお花でもう全部埋め尽くすというような形で葬送すると。そうしなければいけないわけではありません。ただ花は捨ててしまったりするのでもったいないというのと、勿論余ったものは参列された方に配ることも出来ます。花束にして配るということも勿論出来ますので、明るく雰囲気を出すためには、その花というのは非常にキリスト教式の葬儀では重要ということです。ですから、そこが一番お金がかかるということを考えて頂いて、如何に安く済ませるかということを考えたら、その部分が大きいということです。

あとは、メモリアルコーナーというものも式場の外側に設けるのも良いかと思います。故人を偲ぶためのいろいろなスナップ写真、アルバムとか。今回も用意してくれましたけれども、あとは故人の愛用の品。「いつもこの人はこれ

を使っていました。」とか、そういったものがあるととても喜ばれると思います。

いろいろと受付で記帳されたりすると思うんですが、それ以外にもメモリアルコーナーに参列者が、これは故人に向けてのメッセージではなくて、遺族のために残すメッセージも書くようなノートがあると、それもいいかなと思っております。時間的に余裕があればですが。それを後で遺族が読んで慰められるということです。この人はこういう人でしたとか。その思い出やエピソードを一言でもいいです。何かお礼の言葉でも結構です。本当にお世話になりましたとか。この方は、こういう方でしたとか、何か墓碑に刻むようなそんな短い文言でも結構です。それを遺族のために書いて残すと、後でそれを読む遺族は本当に慰められると思います。口頭でも伝える事は出来ませんが、書いておくそれは宝物になると思います。それはその日にできなければ、後でも教会関係であればいくらでもそれを皆さんで回して、まとまったら遺族に手渡すということも可能だと思います。まあ、参列された方に対してメモリアルコーナーにそのようなノートを置くのも1つの手かだと思います。

今お話しているのは十分準備が整っている場合でありますから、急にこれを用意するというのは難しいと思いますから、今からでもある程度皆さんもイメージを持って頂いて、こういったものがあるといいなあというもの、必要不可欠なもの以外にもいろいろと用意をして頂きたいと思っております。

返礼品のタイミングなんですけれども、即日返しは今一般的だと思います。後日返しというものもあります。来た時に半返しをして、或いは3分の1返しをして、後から郵送すると。それも金額のタイプによって、最近ではカタログで選ぶというのも結構あります。所謂『御花料』に応じたものです。香典とか御霊前というのは、キリスト教では『御花料』と言いますけれども、その御花料の金額に応じた3,000円コースとか、5,000円コースとか、1万円コースとか色々あります。それをカタログでいろいろなものをその中から後で選んで郵送してもらおう。そういうのが結構多いと思いますが、即日返しが一番楽だというふうに思います。昔は、海苔とか、お茶とか、もう大体決まったものでした。乾物とか、タオルとか。最近では文房具とか、商品券とか、実用品も返礼品としてよく使われるようになっております。いつも葬式に行ったら、海苔とか、乾物とか、お茶とか、そのようなものばかりという時代ではもうなくなりましたので。

あとは、その御花料そのものを辞退すると、「受け取りません。」ということも1つオプションとしてはあります。それも昨今増えています。アンケート調査によれば、関東では3割の人が御花料は辞退するということです。関西では8割の人が御花料は辞退するということです。都市部に行けば行くほど増加傾向にあるということです。ですから、東京あたりではそれはもう一般的だということです。ご霊前とか、供え物とか、花輪とか、その類は、一切ご辞退致しますというそういうケースです。最近増えています。聞いた話では、京都地区のキリスト教関係ではもう御花料は一切なしというところが多いということです。ですから、地域によってこれも違うわけです。それがないと失礼に当たるとか、いろいろこの辺の田舎では、まだまだ因習も残っていますから、キリスト教式とは言え仏式の習わしのそのお礼の部分とか、心情の部分、それを尊重して欲しいという申し出は結構あります。

あとは、会食です。仏教で言えば精進落としとか、お斎にあたるもの。キリスト教ではそれを『偲ぶ会』とか、或いは『記念会』というふうに言うんですけれども、葬儀の場合は大体お昼にかかったりしますので、夕食ではなくて昼食になります。あとは、火葬も場合によってはお昼にかかる、時間帯によってまちまちですが、午後の場合もあります。小腹も空くので、軽食を用意することも必要になります。おにぎりとか、サンドイッチとか、茶菓子です。これを全部一括して葬儀社に頼むということも可能です。勿論それなりのお金は取られますけれども、それを遺族だけで揃えとか、教会で揃えとか、そういうことも出来ます。なるべく遺族には負担のないようにしていきたいというのがこの教会の願いでありますので、キリスト教式で教会主催でやるとしたらそういった事は一切遺族は考えなくていいという形にしていきたいと思っております。で、勿論教会の場合は、会食ということであればポトラックとかでいいと思っていますけれども、或いはどこかにお弁当を頼むということも可能だと思いますが、いずれにしても大体お昼にかかったりするので、食事は避けられないと思います。やらなければいけない、食べさせなければいけないという事は勿論ありません。仏教の意味はありませんので、精進落としとか、お斎なんていう意味は全くキリスト教にはありませんので、あくまで故人を偲んで、一緒に久しぶりに会った家族とか、遠い親戚とか、久しぶりに会った親友とか、お世話になった

方々とか、そういった方々と滅多に会う事は無いですから、そこで一堂に会して食事をする。そこに意味があるわけ。そこからまた故人の話も打ち解けた雰囲気の中で聴くことが出来ます。ですから、供養になるとか、そういうことはありません。

当然亡くなった方の食事は用意する必要はありません。天国でもっとおいしいものを食べていると思いますから。そんな必要は一切ないということで、その辺も伝えておかないと「これは葬儀の所謂お斎にあたる、精進落としにあたる食事なので。」なんていうことを言ってしまうと、必ず故人のものも用意されてしまうことがあります。ですからこれも無駄なお金を使わないで、廃棄処分するだけです。その辺もキリスト教式で行うと、どこか業者に頼む場合はそういうことも伝えておく必要があるかと思います。そうでなければ、どこかレストランとかを予約して、会席で食べれるところとかを人数分予約して、そこでご飯を一緒に食べると。それが楽かと思います。ポトラックでも勿論良いと思うのですが、手間としてはそういった専門の料理店とか、「故人がラーメンが好きだったから皆でラーメンを食べましょう。」とか、それでも全然いいと思います。ですから、そういうキリスト教の場合は、全く儀式的な意味はありませんので、あくまで皆で亡くなった方を偲んで、祝い事として行いますから、祝いの会食、故人をしのぶ思い出の会食ということになります。

そのあと、火葬に入りますけれども、火葬は1時間半とかかかるわけですが、その間も茶菓子などを交えながら故人の思い出話をしたりして、特にクリスチャンであれば信仰の証しをそこで分かち合うということも出来ます。大勢行くわけではないので、特にノンクリスチャンの家族とその時間1つの空間の中で時間を過ごすことになりますので、そこでは積極的に亡くなった方の、故人のその信仰の証しをするのは最適な時間だと思います。どうせ他にやることもないし、どこかに行くわけにもいかないの、そこに缶詰状態になっているわけですから、絶好の機会と言ってもいいかもしれません。火葬の時には職員がついて、火葬が終わったら所謂収骨というのを致します。で、その時には、この辺はまだまだ田舎ですから、もう勝手に職員が仏式で行っていくわけです。「お箸を持って箸渡しをして下さい。2人1組で1つの骨を持って収めて下さい。」なんていうことをはじめてしまうわけです。それは全く必要ありませんので、喉仏の説明とか、「足の方から先に始まって、最後は頭の骨で、喉仏を中心に収めて・・・」そんな事は全く必要ないので、もう勝手にどんどん入れてしまっても全然構いませんので。職員が立ち会わなければいけないことはありません。ただ説明してくれたりするだけで、勝手に自分たちで入れても構いません。ちなみに、関西の方では一切骨を持ち帰らないということもあります。骨壺も持っていけないんです。ではどうするかと言ったら、「火葬場で処分して下さい」と。それはキリスト教の話をしているのではないです。仏教とか他のものでも一緒です。火葬場の方でそういった骨を一括して弔う場所があるんです。ですから、骨を持ち帰らずに済むということも、これは関西の風習としてあるということです。ですから、関東では、名古屋から上の方は、もう大抵は骨壺を用意して行きますけれども、関西の方では「いいから処分しておいてくれ。」と、火葬場の方に言えば勝手に処分してくれます。で、勿論それはこちらでも出来ることです。言えばそうしてくれます。それは資源にもなります。骨からいろんな資源も取れるわけです。で、それが自治体のお金にも還元されます。でも、心情的には皆さん拾っておきたいと思うと思いますから、当然拾うと思いますけれども、喉仏というのはちなみにありませんから騙されないで下さい。「これは喉仏です。」と言っても、喉仏は軟骨ですから、もう無くなるんです。ですから喉仏はありません。何か厳粛な雰囲気です。「これは喉仏です。」なんていう説明がありますけれども、正確には頸椎^{けいつい}の骨ですから騙されないで下さい。喉仏なんて言う呼び方をして、何か仏教の雰囲気の中で行ってしまいがちですけども、一切必要ありません。箸渡しは三途の川を渡るのに無事に渡れるようにとか、全くキリスト教とは関係ないことです。この世とあの世の橋渡しという意味で、^{げんかつ}験担ぎでやったりするわけですけども、キリスト教の場合は各自で収骨。しかも先程冒頭でお話した通り、その骨を収める入れ物は何でもいいんです。倉庫に眠っている壺でもいいんです。愛用している何か骨がちゃんと収まって壊れない程度の容器であれば何でもいいんです。それに入れることも可能です。余ってしまえば、後は入りきらない分は全部火葬場の方で処分してくれますから心配ないです。欲しい分だけ持ち帰る事が出来ます。要らなければ全部処分してもらえるとということです。大峰斎場であれば、パウダーにまでしてくれるということですから、それは事前に予約

しておく必要がありますけれども、そういう対応が可能だということです。

最後にと言っても、最後のこの話が一番皆さんにとっての関心事になると思うんですが、大体葬儀をする上で一番の関心事はお金です。一体いくらかかるのかと。クリスチャン、ノンクリスチャンにかかわらずそこが一番の関心事だと思います。冒頭でも斎場だとか、葬祭具の料金というのは、市役所でも提供しているということを言いました。でも、大抵の人は葬儀社を利用していると思います。互助会に入っている人は、いろんなコースに入っていると思います。何十万円コースとかもあって、いろんなものがそこにサービスとして含まれていると思うんですが、冒頭に言ったような火葬費とか、骨壺の代金とか、棺桶の代金、もうそれだけで言えば、極端なことを言えば数万円で直葬は出来るわけです。法律に則^{のつと}った葬儀は出来るわけです。でも、そうもいかないということで、それなりの葬儀を業者に頼んで行うということなんですが、日本消費者協会が平成 25 年に実施した『第 10 回葬儀についてのアンケート』というもので、全国の葬式費用の平均額というのがそこから発表されているんですが、ただアンケート調査はサンプルが少ないということで精度に欠けるというふうな指摘もあります。でも 1 つの目安としてお聞き頂きたいと思います。全国平均は 188.9 万円です。葬式費用、全国の平均です。これは年々減少しています。安くなっているということです。3 年前は 199.9 万円ですから、10 万円も下がっているわけです。内訳は、葬式の一式費用(基本の費用です。)それが 122.2 万円。寺院の費用(葬式仏教ですから所謂お寺さんに払うお金。)お経をあげてもらうためのお金とか、お布施とかです。お坊さんの接待等、それが 44.6 万円。これは平均です。飲食接待費。それが食事の関係です。それが 33.9 万円です。でも、合計しても 188.9 万円にはならないんですけれども、それぞれの平均値ということなんです。ですから、寺院とか、お寺から離れて行うというケースがどんどん増えていますから、宗教抜きでというケースがどんどん葬式費用を下げていくようになっていくと思います。今のは全国の平均ですが、長野県の平均葬儀費用というのは、葬儀一式の費用は 136.7 万円です。葬儀一式の場合、全国平均は 122.2 万円です。寺院の費用は長野県は 60.1 万円です。全国平均は 44.6 万円です。ですから、田舎ですから寺院の費用が高いです。かなり割高です。その分飲食接待費は 29.5 万円です。これは、全国平均は 33.9 万円ですから、来た人には簡素な料理、お寺さんにはかなり上積みしてと。もちろん戒名とかもこの中に入っているわけです。これはあくまで平均です。葬儀市場の 47%を占めているのが互助会というものです。皆さんも互助会に入っているでしょうか。月々大体何千円かというコースで積み立てていくものです。その互助会というのは、いつも私も葬儀で思うんですけれども、大体葬儀社を使っている人は「互助会に入ってるので、ここを使います。」と言って使うんですが、その互助会で積み立てたお金は、勿論有効なんですけれども、残念ながら多くの人は、それで全て賄^{まかな}えとどこかで錯覚しています。例えば「私は 30 万円コース積み立ててきました。30 万円ぐらいで済めば本当に家族にも迷惑がかからないし、これはもう年金から自分が出しているわずかなお金だけれども、これで葬儀をやってもらいたい。」ところが死んでみたら、30 万円どころではないわけです。それはあくまで基本の料金であって、それプラスいろいろなオプションがあるわけです。それだけでは賄い切れない面があるわけです。先程言った実費、火葬費とかそういうのは入っていませんから、あとは食事の接待費とか入っていませんから、自分の中のイメージでは互助会の積立金で全部カバーしてもらえと思い込んでいるわけなんですけれども、間違いなくそれでは収まりません。勿論そういうことを良心的に説明してくれている業者もあると思います。大体積立金の 2 割増というのが結構多いです。60 万円コースだったら、追加で 12 万円とかという計算です。高い場合は 3 倍ぐらいです。60 万円コースだったら、180 万円。2 倍ぐらいなのは、私が今まで見てきた葬儀では通常でありました。このコースをやりましたと、でも終わってみたら、蓋を開けたらその倍ぐらい請求されている。そんなのは当たり前のケースであって、いつも心を痛めています。

これは東京都の生活文化局が 2002 年に発表したものですが、『葬儀にかかわる費用等調査報告書』というのがありまして、葬儀経験者の中でその葬儀の費用に関して満足していると答えた人はたった 20.6%です。5 人に 1 人しかいない。満足出来ない最大の理由は、葬儀価格の不透明さ。2006 年の公正取引委員会のアンケート調査では、再度同じ業者に葬儀を依頼したくないと思う理由として、「サービス内容が葬儀料金に見合っていないと感じた

ため。」というのが一番に挙げられているということです。適正料金というものがないわけです。定額というものがないわけです。ですから分かりにくいんです。言われたままに「これも必要ですよ、あれも必要ですよ。」と言われるとどんどん膨らんで、所謂別途料金、その上乗せ価格、追加料金というのがかかるわけです。勿論その内訳を見て頂いても、長野市で提供している柩は例えば一番高いものでも 1 万 7,000 円、一番安いもので 1,300 円ということなんですが、葬儀社のカタログを見たら、それは互助会の方では大体勿論セットに含まれていますけれども数万円どころではないです。10 万越しているわけです。でも、原価は数千円です。5,000 円とかで買えるわけです。でも、それを何十万円で売るということになっています。それをもって、ぼったくっていると、悪徳業者だと言うつもりはないですけども、でもそういうビジネス形態になっているわけです。もうただでさえ冷静にいろいろ余裕を持って考えられないそんな状態。もう情緒が乱れて、不安で仕方がない。そういう弱いところにつけ込むわけではないでしょうけれども、もう言われたままに全てやるというのが、もう当たり前というか、そうせざるを得ないという実態が、現状がありますので、つついその言い値で進めてしまうということがあるわけです。

仏教の祭壇というのも 100 万円とか、何十万円、最近では中国製のものも増えているので 100 万円もしないわけです。でも、それも互助会に含まれています。皆さんはクリスチャンですから互助会に入っている祭壇は使わないわけです。でも、祭壇費というのがその互助会の中では一番大きい額です。使わないものに一番大きい額をかけるわけです。勿論葬儀社は、もうそれは 1 回買えば、2 回ぐらい葬式をすれば元が取れるという計算になっています。実にもったいない話です。ですから、互助会に入っている方は、やめろとは言いませんけれども、満期になったら解約も出来ます。ちょっとお金を取られますけれども、途中で解約すると損になりますから、できれば積み立てた方がいいと思いますけれども、キリスト教式でやるともう決まっているのだったら、もったいないです。ただし、その祭壇の分はキリスト教式で行うということであれば、お花に回せるということもあります。その代り祭壇が例えば 50 万円とか、30 万円といった場合は、お花は 10 万円位のお花にそれが換算されてしまうということです。であれば、もうそのお花の面は自分で積み立てておくと。互助会とか使わなくてもそれは可能です。まあ、いろいろセットに含まれていますから、「これは使えません、あれは使えません。」で金額を安くするということは出来ません。かかった料金だけで済むというような形態は互助会には無いですから、セットでもう仕方がないから、含まれているものを使いますと。それで応用出来るもの、転用出来るもの、キリスト教式に出来るもの。全部内容を見て頂いたら、もう仏教で使うものばかりです。はっきり言えば、どうでもいいものに全部お金がかかっているのも、もったいないないつも私は思っています。一応キリスト教式で行うためには、ある程度そこをアレンジしてもらえんということは相談しておいた方がいいと思います。

一般の話を今しましたが、キリスト教式の葬儀というのは、一般的には安いというイメージで通っています。安いからキリスト教式でやりたいという人も少なくないです。慌てて「信者になります。」という人もいますけれども、まあ、このキリスト教式の葬儀の費用なんですが、これもまちまちと言えますが、でも全体的には格安という事は共通しております。私の手元に 1 つは『キリスト教葬儀』というキリスト教の葬儀社の代表の方が書いた本、疋田博さんという人が書いた本と、あと牧師が書いた『愛する人と自分のためのキリスト教葬儀』水野健さんという人が書いた本、2 つあります。この水野健さんは、こちらの『キリスト教の終活エンディングノート』の著者でもあります。その『愛する人と自分のためのキリスト教葬儀』の中に葬儀費用の一例が出ていましたので、キリスト教式のものですから一応参考までに伝えておきますと、葬儀一式の費用(参列者の平均が 70 ～80 人規模)で 55 万円です。飲食接待費、返礼品、火葬関係費用、そこには前夜式、そして葬式(所謂告別式にあたるもの)、それが 50～200 人という見積り。会食は前夜式の場合は少ないですから、身内だけの 15 人とか、葬式の後の偲ぶ会、記念会では 110 人とかいう規模です。返礼品も 2,600～3,000 円という規模、価格帯。火葬関係費用、その自治体によって値段がまちまちですけれども、控え室も使って、それを合計しますと一番安くて 19 万円。高くて 82 万円という幅があります。奉仕者のお礼ということで、司式者、奏楽者、そして教会の会堂を借りた場合は所謂会堂使用料ということになりますけれども、それが 5～20 万円ということです。先に挙げた葬式一式費用の 55 万円と、飲食接待費から諸々の返礼品を含めた

額、それは67～180万円の間です。これが大体標準だそうです。規模が小さいと30人程度ですと24万円。10人ですと21万円。ですから10人ぐらいでおさめたいということであれば、全部で21万円と。格安と言えると思います。

もう一つの事例。それは『キリスト教葬儀』の著者の疋田博さんという人、この人はキリスト教葬儀精神セレモニーという葬儀社を持っています。東京の足立区にある会社ですが、東京近郊も扱っております。そこではホームページを見るとセット価格で85万円。これは100人規模です。ただし、その中には、火葬費用、教会への謝礼、会場費、返礼品、食事代は別ということです。ですから、85万円(100人集めて)あとプラスアルファです。この本によると牧師への謝礼が1～10万円。会堂献金(会堂の使用料)が1～10万円。奏楽者が1日5,000円から1万円。その他の奉仕者は一括して1～5万円。こういった事は別にMGFでは特別定めていませんが、あと納骨に際しては、牧師への謝礼は3～5万円＋交通費。記念会を開いても牧師にまた謝礼を払うと。教会関係者以外の、要するに会員でない人の葬式であれば、全部の2倍だそうです。全部倍額になるということです。それが一般のキリスト教の事例を(東京近郊です。田舎に行ったらもっと高くなると思いますが田舎の方ではこういうデータがないので)お話ししております。そういった目安というのがあります。

あとは、株式会社ナザレという、やはりキリスト教専門の葬儀会社です。これは東京練馬にあります。葬儀に不可欠なものという項目には26万3,000円。これは柩、ドライアイス、搬送のための寝台車、そして柩車(霊柩車のことです。)、火葬料、お手伝い料(1人当たり日給ですが業者に払うお金です。、)2万6,500円、1日2名二日間大体必要です。あとは収骨のその骨を入れる容器。それが26万3,000円と。で、プラス2番目として葬儀に必要な物、これはオプション選択でいくらでも派手に出来るわけです。お花を増やしたいとか、諸々、写真とか、礼状とか、プログラムとか、あとはマイクロバスを出すとか、返礼品の有無です。そして、牧師・奏楽者への謝儀とか、式場使用料、遺体の保管料、あと心付けというチップにあたるものです。そういったものが47万2,500円から65万円程度。ですから26万3,000円＋47万2,500円から65万円。これも一般的な額です。

親愛セレモニー、これも東京にありますけれども、直葬の場合、火葬のみ。それは密葬にあたるもの。21万円です。家族葬は38万円。で、スタンダード葬というのが75万円で、デザイン葬というのが100万円。デラックス葬が150万円ということで、これもセット価格になっております。

イースター式典社、これは兵庫県西宮にある会社ですが、基本料金は50～100万円。

同じく西宮にあるラザロ式典社。基本料金は25万円。＋オプション。

そして、クリスチャンセレモニー株式会社幸企画、名古屋にあります。基本料金は12万円。＋追加料金は0～20万円。12万円というのは先程お話しした、もう何もしない、もう格安の柩を買って、火葬料を払って終わりと。

もう一つ、名古屋にある会社、ディーズというキリスト教専門の業者は、スタンダード葬が55万円。ファミリアというのが40万円、ベーシックが22万円と。内訳は今言っていませんけれども、大体そういう目安でやっております。

クリスチャンの生活百科には、牧師の謝礼というところがあって7万円以上、奏楽者の謝礼は2～4万円。これは前夜式とか葬式に2回に分けて。感謝献金というのは全体の費用の10分の1。

正直言うと、全部高過ぎます。ただ、彼らも仕事をしなければいけないので、葬儀社はキリスト教の専門業者があればそれが一番です。残念ながらこの辺ではあまり扱っているところが少ないので、県外から呼ぶということも可能ではありますけれども、すぐに対応するのは厳しいと思います。教会で出来る範囲でなるべく経済的な負担が無いようにもこれからいろいろプランをしていきたいなどは思っておりますけれども、一応こういう目安を、金額的なことも、皆さんも知っておく必要もあると思いますし、皆さんは死んだら関係ないわけですから、こういったことをやるのは遺族が対応します。その遺族にもある程度伝えておく必要があります。

あくまで目安ですから、これを持ってこうしなければいけないということは一切ありませんので、参考までにということで皆さんの一番の関心事は、お金だと思いますから、お金に関して今少し話をしましたけれども。でも、最近では葬儀の費用、それはあまりにも不明である、不透明だということで、イオンとかでも葬儀の価格破壊、或いは追加料金一切不要という謳い文句で、格安で定額料制で適正料金というのが分かりやすいように、もうお坊さんへのお金も

決まっているとかです。それで、大分反発を買っているようですけれども。そういったサービスも出ていまして、キリスト教式でも対応しているというところが出ています。

これはキリスト教専門業者ではありませんが、今全国で依頼件数がナンバーワンと謳っているのが、『小さなお葬式』という会社です。これは全国に対応しています。長野でも対応していますが、キリスト教に対応して、小さな火葬のみですと 18 万 8,000 円で出来ます。これが所謂直葬です。ただ、それは無料資料請求をした場合です。そうでないと 5,000 円ぐらいプラスされていると思います。小さな葬式のみですと 33 万 8,000 円。小さな家族葬、これは通夜・前夜式にあたるもの。そして告別式、葬式にあたるもの。2 回やった場合、小さな家族葬は 48 万 8,000 円。で、100 名までの葬儀ですと 63 万 8,000 円。格安だと思います。これはキリスト教式でも対応してくれると、一般の業者です。これを教会で利用するのも勿論出来ますし、皆さん個人で利用するのも出来ます。

ですから、最近はこのような価格破壊というものが、葬式業界ではうねりとなっていて、これからどんどん高齢化が進んで、葬式のビジネスがますます盛んになってくると思います。ですから、どんどん価格は下がってくると思いますけれども、それを適正と呼ぶかどうかというのは、個人の心情の問題ですから、日本人の場合は高い葬式を挙げてあげれば、それだけ供養出来るという感覚もありますので、また安かろう、悪かろうということも言えるかと思いますが、ただキリスト教の場合は簡素で十分です。華美にする必要はないかと思います。だからといって、お金をかけてはいけないとは思っていません。むしろ、それで神の栄光を表すことが出来るならば、大いにすべきだと思っています。

もう一つ、これは DIY 葬というのがありまして、(DIY. Do It Yourself. 自分でホームセンターか何かに行って、日曜大工でいろいろなものを作ると。)それと同じように自分で、DIY、自分で葬儀をします。自分で段取りする場合は、合計 6 万 3300 円で出来てしまうというようなことも、最近では報じられております。ちょっとその記事を読んでみますと、『例えば父親が東京都内の病院で亡くなったとしよう。まず医師から故人の死亡診断書を書いてもらう。これにかかる費用が 5,000 円から 1 万円程だ。大病院であれば遺体安置所があるが、そうでなければ死亡後通常数時間で遺体の搬送を迫られる。まず DIY 葬の第一関門はこの遺体搬出作業である。病院から火葬場へ直行すればいいのではと思う方もいるだろうが、死亡から 24 時間経過しないと火葬してはいけないという法律があるので、遺体はいったん病院から自宅へ運ばなければならない。遺体を安置出来る大きな自動車、ワゴン車などを持っていないなら、レンタカーを借りる必要があるだろう。自宅に着いたら遺体が傷まないようにドライアイスで冷やす。(大峰斎場には霊安室、冷蔵庫があるので空いていればそこも使えるわけです。)ドライアイスは製氷店などで購入。1 日分で 10 キロが目安だ。これをタオルに包んで遺体の両脇、首、お腹に当てておく。真夏なら部屋のクーラーを強めに。1 日 2 日ならこれで大丈夫だと言う。遺体を引き取ったらその日のうちに棺桶を手配する。最近ではインターネット経由で注文を受け付けてくれる業者も増えています。安い物だと 1 万円台の後半からあります。次に役所で火葬許可書を発行してもらう必要があるが、火葬場が決まっていなくて多くの自治体は火葬許可書を出してくれない。個人で申し込むことが出来ない火葬場もあります。日ごろから個人でも申し込み可能な火葬場を探しておいた方がいい。火葬場が決まれば役所で火葬許可書を受け取り、火葬へ移る。東京都の臨海斎場(大田区にあります。)火葬料は 2 万 3,000 円からだと言う。火葬料は地域によって様々。地方では故人がその土地の人であれば、火葬料は無料の場所も多い。火葬済みのお骨を骨壺に収めて、火葬証明書を受ければ、DIY 葬は完了だ。』ということで、死亡診断書が 1 万円、遺体の搬出のレンタカー代が 2 万円、ドライアイスが 10 キロ×2 日分で 1 万円ぐらい、火葬料は 2 万 3,000 円、火葬証明書が 300 円。合計 6 万 3,300 円。ということなんです。これは 1 人でやるというのは、家族がやるというのは、とても大変なことだと思います。ですから、やろうと思えばこういうことも可能だと。勿論これよりも安く長野では出来るわけです。ただ、私たちは安く済ませるということを目的としているわけではありませんので、あくまでキリスト教式でやることの意味というのがありますから、直葬であれば別に灰にした状態で『記念会』を後で教会でやるとかいうことも可能です。ですから、お金がないという場合はもうすぐに 24 時間後に火葬して、そして骨壺に骨を収めた状態で、後で皆さん教会に集まって『記念会』をしましょう。これも経済的に困難であれば、やり方としては 1 つのオプションだと思います。

ということで、大体キリスト教式の葬儀、そしてそこに特にまつわる実際面、こういう事しなければいけない、こういう準備をしなければいけない、これだけの費用がかかりますと。互助会に入っているから大丈夫です、と思っていたら大間違いです。互助会にはいろんな問題があります。ですから、互助会を利用してもキリスト教式で葬儀は当然出来ます。これまでも度々そうしてきましたし、いろいろ相談にも乗ってくれますし、業者を介してやるというのが一番楽なんです。遺族には負担がありません。牧師も勿論楽な面もあります。ただお金がその分かるということ、互助会の場合は大分無駄が生じて、プラスアルファ、キリスト教式だからということでお金を取られるということも覚悟しなければいけません。ですから、その辺も皆さんも計算をして頂いて無駄が無いように、神様から預かっているお金ですから、自分のお金だと思って自分の好きなようにやるという考え方ではなくて、預かっているお金を如何に有効に使うのか。「御花料を教会に献金します。」と言うそういう人もあります。或いは福祉施設に寄付しますとか、基金という形にして「これこれのために使ってください。」と。返礼品を一切出さずに、そういう辞退の仕方もあります。「受け付けますけれども、全部それはお返ししませんよ。」と、だから出してこないということになるわけですが、そういうこともいろいろやり方がありますから、是非皆さん考えて頂いて。

この教会では皆さんがボランティアでやって下さいます。別に私も謝儀を受け取らなければやりませんということは一切ありません。当然皆さんの葬式は、家族の葬式ですから、喜んで積極的に当然無償で献身的にボランティアで働かせて頂きたい。それは光栄なことであって、特権だと私は思っております。ですから、お金がないから教会には頼めない、なんて思わないで下さい。喜んで教会で犠牲も払いますし、勿論私たちは今までもそうしてきたわけですし、皆さんの協力がなければ私や妻だけでは葬式なんかとても出来なかったものをこれまで出来たのは、皆さんのサポートがあつてのことです。私はこれをシステム化するつもりもないので、これまでもそうであったように、これから身内としてこういった葬儀には当たりたいと思っております。ですから、一切お金を請求するつもりもありませんし、「是非使ってください。」ということであれば喜んで受け取りますし、「感謝の気持ちです。」と言えば無下に断ることも致しませんが、最初から辞退しておりますし、必要はありません。

で、『記念会』も教会主催でやりたいと思っているので、それも遺族には一切お金をかけさせない。普通は法事とかやって、お坊さんと呼んだらその都度お金を下ささなければいけないわけです。当然食事の費用もかかるわけですが、この教会ではそういったことは一切致しません。するつもりはこれからもありませんので。ただし、皆さんにはそれなりの負担をかけることになりますが、それは皆で家族ですから分け合っていくのは当たり前だと思いますし、自分の時もそうしてくれるということを信じて頂きたいと思います。ですから、教会によってもいろんなやり方があるので、今のは一般のキリスト教式の葬儀の大体の流れと目安。この教会は必ずしもそれに沿っているわけではないということも踏まえて頂いて、このことを皆さんのまず理解として頂き、そして特にクリスチャンではない家族には、詳しく話していく必要があろうと思います。クリスチャンの家族はこれを皆で聴けるわけですし、普段からこういう話を出来ると思いますけれども、ノンクリスチャンの家族。結局葬儀をするのは誰か。喪主を立てて、残された者たちがそれを対応していくことになりますので、私もそのためには事前に会っておく必要があると思います。牧師がどんな人かも分からないと、「もう教会に一任しているんですよ。」なんてことを言っても、「牧師の顔も見ただことないし、キリスト教式で行われるとどういう葬儀になるのか分からないし、どういう気持ちで、どういう姿勢で臨まなければいけないのか、全然サッパリ分かりません。」という状態で、いきなりあなたが死んだら家族は困惑するわけです。ですから、是非事前に、事ある度に伝えて頂きたいと思っております。

先程挙げた本等も、それぞれの立場でいろいろ書いてありますので、また興味のある方は読んで頂きたいと思えますし、また質問のある方はいくらでも、どんなことでも結構です、忌憚無く聞いて頂いて、遠慮なく質問して頂いて、細かく答えたいと思っております。なるべくその故人の気持ち、意向、願い、リクエストを反映した式にしたいというのが、私の願いなので、いきなり死なないで下さい。ある程度元気な時に、残すものはしっかり残して頂いて、意思です、ね、どういう式にしたいのかという表明。それを文章にしてちゃんと家族にも、そして牧師の私にも、皆さんにも伝えておいて頂きたいと思えます。

ちなみに私の場合は、喪服は着ないで下さい。皆さん明るい格好で私を偲んで、暖かければアロハシャツとかで、明るい雰囲気に来て頂いて、勿論正装で来たいという場合は黒のネクタイではなくて、白のネクタイに来て下さい。そういう、不適切と思われるかもしれませんが、是非私の葬儀の時にはそういったことも。

皆さんも細かいことでいいですから、「私のイメージカラーはこれなので、この色で統一して下さい。」とか、そういうことがあれば、お花のほうもそういう手配も出来ますし、プログラムの色なんかもいつもいろいろ考えてはいるんですけども。いろいろそういうことも、細かいことなんですけど是非考えて頂いて、用意をして頂きたいと思っております。

とりあえずこれでいいですけども、また終わったら祈って、質問があればすぐ答えたいと思います。そして、写真とかビデオとかは是非残して頂いて、M 君に編集してもらっておいて、結構直前になると凄く慌ただしいので、忙しいので、もう今から予約をして頂いて、いろいろ資料を用意してもらって、いろんなキャプションもちゃんと入れてくれますし。Oさんが証して下さった時は、息子さんのYさんがたまたまボイスレコーダーでそれを取っておいてくれたので、それは本当に私にとっては嬉しいことで、記念会でも使いたいと思っているんですが、できたらそれはビデオで撮ってあったら、より良かったなというふうに思っております。ビデオメッセージなんかも、時たま生前に用意する人もありますけれども、是非そういったことも皆さんにも考えて頂いて、より良いお葬式。それは、より一層遺族を慰め、遺族に天国の希望を確信させるものとなり、そしてそれはひいては神の栄光を表すものとなるという。それは私たちの務めでもあると思います。最期も私たちは神の栄光を表しながら、証しながら死んでいく。もう死んだら知らないではなくて、死をもっても証し出来るということです。で、その時の証しはパワフルです。普段の皆さんの生きている時の、イエスを信じるものはまた死んでも生きるんですけども、ただ死んだ時、その時の証しは力強いです。心に響きます。今回は O さんの式をして、ノンクリスチャンの身内から感想を聞いた時に、「式を通して全てが腑に落ちました。」と。何が腑に落ちたかと言うと、「Oさんが普段から言っていたこと、やっていたこと、信じていたこと。それがどういことかが、この葬式を通して全部腑に落ちました。」という言葉が聞かされた時はとても嬉しかったです。ですから、今までは何かよく分からないと。そういう考え方もあるのかなとか、ちょっと自分にはあまり関係のない話かなと、いうふうな認識だったのが、全部点それが点と点がもうバラバラだったのが全て線で結びついて、「こういうことだったんだな。」と、最期死に様が一番強く、家族にメッセージを焼き付けるようにして残したという、そういうことも今回ありましたので、皆さんも今、証したりするのに家族の間で大変苦慮していると思います。「頑^{かたく}ななんです。全然言うことを聞いてくれないんです。全く相手にされません。むしろ反発ばかりされて、これでは本当に救われるとは思えません。」と。あなたが生きている間は、もしかしたら拒み続けるかもしれませんが、あなたが死んだ時、ひょっとしたら彼らは心を開くかもしれません。勿論死んだ後も、祈りは生きていますから、あなたが亡くなった後、祈りが答えられることも十分考えられる事です。ジョージ・ミュラーという人は、そのように祈り続けた人です。死ぬまで諦めずに祈って、彼が死んでから彼の祈りが答えられ、救われた人が起こされたという事は有名な証しであります。だから皆さんも希望を持って下さい。では、これで終わりたいと思います。